教員養成課程国語教育講座　松岡　礼子

魅力ある国語科教育への誘い
：小学校の現職教師によるメディア教材を用いた模擬授業の考察

1　はじめに

本研究の目的は、小中高の現場で働く実践研究者と本学の教育法の授業とを結んだ魅力ある国語科教員養成プログラムの提案にある。本発表では、粟野志保教諭（吹田市立吹田第一小学校）と発表者との共同研究の一環として取り組んだ二つの授業を考察したい。粟野教諭と発表者はともに大阪教育大学国語科メディア・エデュケーション研究会（代表：松山雅子・本学名誉教授）発足時からのメンバーである。粟野教諭は本学修了後、大阪府下の公立小に勤務、教職22年目のベテラン教諭であり、児童の言語実態に即した素材選びと単元構想に長け、大阪府下の小学校における国語科メディア・エデュケーションを牽引し、全国大学国語教育学会、日本国語教育学会等で数多くの提案をしてきた。今年度より大阪府国語科指導教諭をつとめ、若手現職教員の国語の指導力育成に指導者的立場から臨んでいる。

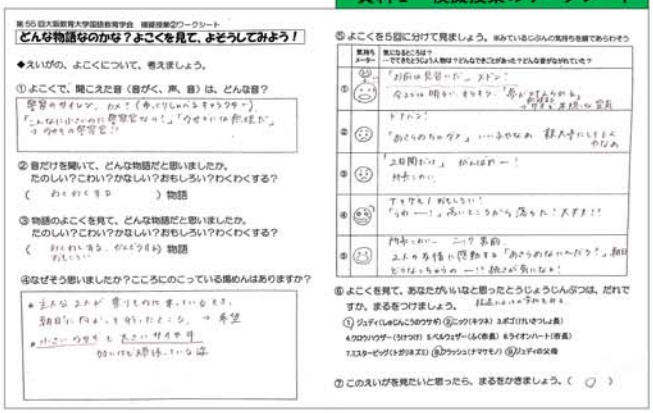
本発表の考察対象のひとつは、本学国語教育学会主催夏学会（2019年8月3日実施）における学部生対象の模擬授業であり、もうひとつは初等国語科教育法におけるゲストティーチャーの取り組み（2020年1月6日実施）である。前者は講座全教員および学部生・院生の協力と令和元年度教員養成課程プロジェクト経費「卒業生・修了生を活用した教員志望率・教員就職率を向上させる取り組み」（代表：井上博文・国語教育講座主任）の助成があって実現した。後者には令和元年度「研究活性化推進経費（科研費スタートアップ経費）」の助成を得た。

2　長編アニメーション映画「ズートピア」予告編の教材化（小２）に対する受講生の反応

2－1　国語科専攻4回生対象模擬授業の考察

⑴概要　児童役は17名（4回生14名,3回生1名,教職大学院生2名）で、あとの国語科専攻1～3回生（142名）は授業観察をおこなった。めあては、視聴者に映画本編を見たいと思わせる予告編の仕掛けに、学習者が自覚的になることである。

資料１　模擬授業のワークシート



⑵受講生の反応　以下に示す①～③は、2、3回生の特徴的な反応三例である。国語専攻の2,3回生は、これまでに映像テクスト分析に関わった経験や模擬授業をおこなった経験がある。①は個々の興味や問題意識に関わらせて模擬授業を評価し、②は模擬授業の構想段階の創意とねらいへの理解を示し、集団での物語体験の意味づけをおこない、③は自身の模擬授業を振り返る契機となったことを示す。

①本編ではなく、予告に注目しているのが面白かった。内容の面白さではなく、いかに人々の興味関心をひくかを考察する点は、今までに考えたことがなかった。

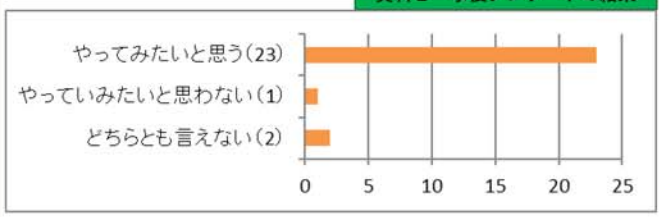
②小2はわからない言葉も多く、絵はもちろん、音のイメージでいろいろなことを認識しているんだなあと改めて思った。積極的に周りの子と意見交流することで、語彙の少ない子たちが他の子の書いている自分にぴったりな言葉を見つけられたり、言葉に出来ない印象に残ったシーンを見つけられたりして良いと思う。

③「大学生と実際の小学生では反応が全く異なっていた」という話を聞いて、自分達のしてきた模擬授業の時の反応と実際に実習を行う生徒の反応は違うのではと、不安を覚えた。

2－2　初等国語科教育法でのメディア教材を用いた実践の考察

⑴概要　発表者による他専攻（数・美）クラスでの「ズートピア」実践。以降は事後アンケート「**あなたが小学校の先生なら、この授業をおこないたいと思いますか**」の結果である。有効回答数は26。

資料２　事後アンケートの結果



⑵受講生の反応　資料2から圧倒的多数が「ズートピア」予告編の教材価値を認めたことがわかるが、回答の如何に関わらず、メディア教材を国語科で扱うことへの興味関心意欲と不安が併存していることが、以下の理由説明のことばからうかがえることが特徴的である。

「やってみたいと思う」の選択理由：

○受けていて楽しかったのでやってみたいと思った。しかし自分で行うとなるととても難しそうだ。挑戦はしてみたい。（美／女）

○やってみたさはあるけれど、とても難しそうで考えものです。自分がスキルアップできればぜひ！（美／女）

○教材研究が非常に難解で複雑になりそうな感じがする。成功すれば有意義で興味深い授業になると思う。（数／男）

○時期に合ういいメディアがあればできると思う。無理に時期に合わないトレンドでないメディアならやらなくていい。（数／男）

「やってみたいと思わない」の選択理由：

●教材分析が難しそうだし、すでに見た人と見たことのない人で差ができたりしたら問題だと思うから。（数／女）

「どちらとも言えない」の選択理由：

▲やりたいとは思うが、子どもの想像力や新たな視点を見つけられるような視点を私が持っていない気がするから。（美／女）

2－3　実践研究者と出会わせる意義

自分にできる・できないは別にして、低学年の国語教室でメディア教材を用いることの必然性はどの受講生も理解していた。彼らが経験したのは粟野教諭による理論と実践の往還であり、その実践的指導力に反応したことを彼らの言葉が示している。本企画の成果である。

3　「初等国語科教育法（書写を含む）」における国語科メディア・エデュケーションの取り組み

資料３　2019後期　国語科メディア・エデュケーションの取り組み

01回　オリエンテーション／入門期の学習指導
02回(10/17)国語科メディア・エデュケーション⑴低学年の言語表現活動例
03回　「話すこと聞くこと」の学習指導の基本的理解
04回　「書くこと」の学習指導の基本的理解　教科書の体系考察
05回　書写
06回　「読むこと」の学習指導の基本的理解　「ヒロシマのうた」挿絵比べ
07回　説明テクストの教材分析　「たんぽぽ」他
08回　説明テクストの教材分析　「ありの行列」他
09回　国語科メディア・エデュケーション⑵「写真はことば」
10回　物語テクストの教材分析　「おおきなかぶ」他
11回　国語科メディア・エデュケーション⑶宮沢賢治とニューメディア
12回　現職教員による実践報告・模擬授業⑴　２年生の教室から
13回(1/6)現職教員による実践報告・模擬授業⑵　１年生の教室から
14回　物語テクストの教材分析　「やまなし」「雪わたり」
15回　全体のふりかえり：授業の総括

資料3に後期「初等国語科教育法（書写を含む。）」のメディア・エデュケーションの取り組みを太字で、粟野実践に関わる回を傍線で示した。第13回（2020年1月6日）はゲストスピーカーとして登壇し「はなのみち」（小1・M社）の絵とことばの関わりに留意した教材分析に受講生を誘った。「文章だけでなく絵も対比構造になっていることに気が付いた時に、挿絵の分析を面白いと思えました」（数／男）と感想を記した受講生は、ここににいたってようやくマルチモーダル・テクストとしての教科書教材に出会えた。

4　おわりに

さまざまなモードの組合せが児童・生徒の想像力にどう働きかけるのか。そのことに意識的な指導者育成のためのカリキュラム構想の必要性を改めて思わされる。初対面のゲストティーチャーに「実習で一番苦労したのが国語だった」と思わず吐露する学生がいた。頼りになる先輩教員がいること、期待できる後輩がいること、双方が励みとなる両者の関係性を強みとして、現場と大学の共同研究を基盤とした魅力ある国語科教育の提案を続けたい。